

ジョン・ヴァン＝マーネン

「フィールドワークの物語ーエスノグラフィーの文章作法ー」(1999 現代書館)

(原書: John Van Maanen “TALES OF THE FIELD -On Writing Ethnography-” 1988)

第一章 フィールドワーク・文化・エスノグラフィー

＞エスノグラフィーとは… (冒頭文)

「ある一つの文化の（あるいは、ある一つの文化の中から選択された諸相の）記述による再現である」

＞本書の目的

エスノグラフィーの文章作法に注目し、その結果、文化のさまざまな描写の仕方を検討して、改良することである。

○スクライプス トライプス記述と部族

＞如何にフィールドワークが行われるか。

フィールドワーク（＝参与観察）とは、研究対象の人々とともに生活し、またそうした人々のように生活することを意味する。

＞フィールドワークの目的

「文化」を描くこと。しかし、「文化」とは？

→文化は、その成員の言葉や行動に現れ、「書くこと」によって見えるようになる。

⇒つまり、フィールドワーク≠エスノグラフィー

○エスノグラフィーの制約

1. 「経験」に基づいて書かれる
2. 「政治力」による介入（＝集団への別の集団からの影響）
3. 制度的問題
4. 物語上、修辞学上の作法
5. 歴史的・時代的制約

⇒本書では、第一に4、第二に5が関心事。

本書で示すことは、エスノグラフィーは単に書くよりも多くのことを伴うということ。

○予告

第二章：現代のフィールドワークの出現過程をスピーディーに追う。

第三章：写实的物語ー「事実」に基づく。

第四章：告白体の物語ー文化よりも、フィールドワーカー自身へ焦点化。

第五章：印象派の物語－上記二つと異なる独特の形式。両方の要素を持つ。

第六章：余剰物のような他の四種類の物語形式に言及して結論とする。

⇒上の分類は便宜的なもの。書き方についての考察を深めるための分類。

第二章 文化を追い求めて

＞フィールドワークの概念の歴史

人類学と社会学における流れを別々にして扱い、最後に融合させる。（もちろん、実際はお互いに影響を与え合っているのだが）。

○フィールドワークの実践

＞人類学での流れ

1. 初期

19 世紀から。問題は、旅行者の記録との違い。

→解決策＝「探検家の未開人観察における第一の欠点は、その不完全さである…（中略）…その発見には規則的な図式化がまったく見当たらない」〔Degerando (1800) 1965 p.65〕。

だが、当時は、他の技術が盛んだった。

(i) 科学的調査を目的とする大規模な探検の旅。

(ii) 一般的だったのは、「文化調査の安楽椅子方式」。

(iii) 大がかりで独特な学術調査旅行の小型版。短期間で、集中的なデータ収集。

2. フィールドワークへの流れ

1920 年までには盛んになる。

→理論の持ち込み&フォーマルなインタビュー（「ベランダの人類学者」）。

⇒個人的体験にほとんど依存していない。

マリノフスキー（英）、フランツ・ボアズ（米）の登場。

→1920 年代後半までには、現代的なフィールドワークとフィールドワーカーのイメージが人類学の基礎になる。

⇒研究者が対象文化の中に入り、成員の言葉や行動から理解するようになった。

＞社会学での流れ

1. 起源

19 世紀後半のウェブ夫妻や、デュボワ。（しかし、これらはきわめて稀な事例）

2. シカゴ学派による推進（1920 年代～30 年代）

ロバート・パークらが、学生たちを都市へと急き立てた。理由は、「醜聞を暴くこと」と「改革」。フィールドのデータの、整理と報告のみ。

1930 年代後半までに、「逸脱したサブカルチャー」のエスノグラフィーが大量に（例：「都市のギャング」）。

→こうした研究では、フィールドでのインタビューと観察が行われた。

その後、ヒューズが、より快適な生活を送る人々へも調査対象を拡大。

>社会学と人類学の中でのフィールドワーク

- ・社会学：フィールドワークに適した場所は小さく、地位も低い。
- ・人類学：フィールドワークは地位が高い。

→社会的構造の違い。

- ・社会学：社会理論家を頂点とするヒエラルキー。文化的に普遍的な理論モデルの構築が上位。フィールドワーカーは、「周辺の貢献者」。
- ・人類学：文化は独自のものという考え方。文化の違いを超えた解釈は制限されているため、簡単に一般化しない。

○似て非なるものー共通点と相違点

>相違点

	対象	研究過程	立場	スタイル
社会学	「都市の脈絡」	変異化	周辺の	文化批判的
人類学	「異国・異文化」	長期滞在	中心的	文学的

>記述スタイルの違いの要因

1. テーマ

- ・社会学：日常の世俗的、経済的、政治的、公共的、道具的側面。
- ・人類学：神聖な、情感的な、道徳的な、私的な、表現的な生活領域への冒険。

2. 学問的な資格

- ・社会学：言語的、文化的に同一の読者を想定→絶えざる挑戦にさらされる。
- ・人類学：言語が違う人々の文化を「代わり」に語ることになる。字義通りに翻訳しても意味がない→表意的アプローチとメタファーの使用

○今日のエスノグラフィー

両学問でフィールドワークの方法自体が独自の立場。

様々な分野への拡大。（例：政治科学、医学、教育など）

⇒だが、この広がりには、エスノグラファーによって、エスノグラフィーそのものへの鋭い批判がされていたときであった。本書もこの批判に沿うもの。

○エスノグラフィーの読者

書き手は、誰に向かって書いているか（または向けられてないか）により制約を受ける。

＞同業者の読者

エスノグラフィーを熱心にフォローする、最も注意深く、最も批判的な読者。

「ハウス・ノーム」を共有している→例えば、隠語の使用

最も一般的な基準は、「共同体的基準」。さらに、文章の「技術的基準」。

＞社会科学系の読者

情報提供を求めるため、事実のみに着目。エスノグラフィーの方法論や、認識論には関心がない。しかし、新たに評価し直す人もいる。

＞一般の読者

フィールドワーカーはストーリーテラーになり、エスノグラフィーは寓意的性質を強める。現代西欧社会と比べ、風変わりな内容。「皮肉」など（例：「理性的な野蛮人」）。

→誤解の可能性→エスノグラフィーの妥当性を判断できるのは、専門家だけ？

→「文学的基準」（例：忠実さ、迫真性など）も書き手に要請される。

○新たな領域を求めて…

パブリックな領域を扱うエスノグラフィーの一般読者の数も増加傾向。現在、文学的スタイルや文章の質に対し注意深く配慮しようとする動き。

→科学対芸術の問題→現在は、エスノグラフィーは解釈を伴うプロセス。

↑主体－客体の区別を曖昧にする解釈学や現象学などの社会哲学の影響。

→筆者は、認識する側される側の関係は不確実であり、両者は独立ではない、という現象学的見地に立っている。

Comment

「データの取り方、解釈の仕方だけではない」

＞「書く」ということへの着目

- ・ データ取って解釈して終わりではない。
- ・ 「書くプロセス」と「書かれたもの」がある。
- ・ 「書かれたもの」を読者が読む。
- ・ 質的心理学会での出来事。

→ある社会学者「文学的表現は分かるんだけど…研究者としてそれでいいの？」

- ・ 研究のアウトプットである論文は確かな知見を提供するもの。
- ・ 文学的表現だとそれが揺れてしまう？
- ・ でも、「人間の科学」では読み手も「解釈」することが重要なのではないか？